



2022 年 12 月 25 日

# JACET-Chubu Newsletter

一般社団法人 大学英語教育学会中部支部 No. 49

## 2022 年度の活動

支部長 今井 隆夫  
(南山大学)

支部会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。2021 年度より担当させていただいております現執行部も 2 年目を迎えました。コロナ騒動に振り回されず、かつ、コロナ騒動で得られたオンラインという良い面も活用した支部運営を目指し、後半の 2 年目を役員の先生方にお助けいただきつつ、支部運営にあたらせていただいております。今年度の行事は、「支部大会」「第 1 回定例研究会&講演会」「第 2 回定例研究会」の3つで、既に前者2つが行われています。

### 目次

2022 年度の活動 今井隆夫 1 頁

#### 講演会報告

Christiane Lütge 氏

「講演会 “Digital Citizenship Education Perspectives for Foreign Language Teaching” (Christiane Lütge, University of Munich) を拝聴して」

安達理恵 2 頁

#### シンポジウム報告

若林 茂則氏・中川 右也氏・米澤 由香子氏・藤掛 千絵氏

「プロジェクトベースの国際交流を通した外国語教育」

石川有香 4 頁

#### 研究会報告

日英インタラクショナル研究会

大谷麻美 5 頁

事務局より

6 頁

1 つ目は、支部大会[6 月 4 日(土)オンライン開催]です。大会テーマを「国際交流とこれからの大学英語教育」とし、オンラインの利点を生かし、海外より Christiane Lütge 先生(ミュンヘン大学)に基調講演をお願いしました。また、「プロジェクトベースの国際交流を通した外国語教育」というテーマでシンポジウムを行い、若林茂則先生(中央大学)、中川右也先生(三重大学)、米澤由香子先生(東北大学)、藤掛千絵先生(南山大学)の 4 名をシンポジストとしてお迎えし、プロジェクトベースの英語教育の取り組みについてお話を伺いました。

2 つ目は、「第 1 回定例研究会&講演会」[11 月 27 日(日)オンライン開催]です。定例研究会の部では、日米インタラクショナル研究会による研究発表と 3 件の実践報告が行われました。講演会は、大学生に対する教師教育(teacher training)をテーマに、教師教育がご専門の Anthony Cripps 先生(南山大学)と内田浩樹先生(国際教養大学)のお二人をお迎えし、教師教育に有益なお話を伺うことができました。

現執行部体制での最後の行事は、第 2 回定例研究会[3 月 11 日(土)]開催を残すのみとなりました。第 2 回定例研究会は、この原稿を書いている時点では、企画中ですが、授業学研究会による研究会発表が決まっております。そのほか、講演、研究発表・実践報告を予定しています。

## 講演会報告

### 2022 年度中部支部大会 講演 「 Digital Citizenship Education— Perspectives for Foreign Language Teaching」

Christiane Lütge  
(Ludwig Maximilian University of  
Munich, Germany)

2022 年 6 月 4 日 [Zoom 開催]

社会のあらゆる面で急速にデジタルフォーメーション (DX) が進んでいるが、そのような社会において望ましいデジタルシ市民となるためには、デジタル上の誤った情報に気を付けたり、間違った使い方や危険な状況に陥らないための教育が必要になる。従来異文化間教育を始め、グローバル化に伴い、グローバル教育、さらにはグローバル市民教育が注目されたが、現在、デジタル市民教育も注目されている。では望ましいグローバルなデジタル市民とは、どのような人かという、デジタル技術を使用しながら望ましい行動規範ができることである。

今回は、デジタルシチズンシップ教育について、アメリカとヨーロッパの文脈で実践されている重要な実践を2つを紹介したい。まず、前者では Digital Citizenship in Schools (著: Mike Ribble) が実践的で役立つだろう。そこでは、デジタルエチケットやデジタルの権利やデジタルへのアクセスなど9つの要素を解説している。特に、デジタル技術を幸福につなげるためにどう使用すべきかを考えることも重要だろう。また後者のヨーロッパの文脈では、Digital Citizenship Education Handbook (著: ヨーロッパ評議会) がある。ここではデジタル市民とは「多様な能力の発展を通し、主体的に積極的に責任をもってオンラインとオフラインの両面で、地域、国家、グローバルなコミュニティに関与することが可能な人」と定義している。ヨーロッパにおけるデジタルシチズンシップ教育は、RFCDC (民主的な異文

化能力の参照枠)に根差しており、デジタル市民教育は、RFCDC を通して教育され、また反対にデジタルシチズンシップ教育によって民主的異文化能力の価値観、スキル、態度、知識と批判的理解も育成される。ここでは、デジタル市民教育には、10 個の特質があるが、Being Online (access and inclusion, learning and creativity, media and information literacy), Well-being Online (Ethics and empathy, Health and well-being, e-presence and communications), Rights Online (active participation, rights and responsibilities, privacy and security, consumer awareness) の3つに分けられる。またデジタル市民教育では、学習者を無秩序なデジタル環境から守り、正しい向き合い方に導くことも重要となる。したがって、教育の一環では、例えばデジタル教育環境で主体的に行動すること、また他者を尊重しながらどうふるまうか学ぶことや、digital footprint (インターネットを利用したときに残る記録) を意識することも重要になる。

現在ヨーロッパ評議会では DiCE.Lang に取り組んでいる。これは、デジタルシチズンシップ教育と外国語学習、つまり外国語教育におけるデジタルシチズンシップ教育の認知度 (その逆も) を高めることを目的とした欧州の多国籍プロジェクトである。目的の一つは、若い世代がデジタル社会に積極的かつ責任を持って参加できるようにし、デジタル技術を効果的かつ批判的に使用するスキルを育成することである。デジタル化が進む教育において、デジタルツールを使って異文化の他者と交流する機会が増えているが、当然外国語を使用する機会が増え、またお互いの価値観について共通点や相違点を議論したりすることで、言語学習への包括的なアプローチが可能になる。

そして4つの知的成果として、教師の自己省察ツールの開発に役立てる DCE に関する教師の意識などの調査、利用可能なオープンエデュケーションリソース、専門能力開発のた

めの様々な機会の提供、FLE における DCE のための教員研修パッケージを検討してきた。またデジタルシチズンシップ教育のモデルとしては、外国語の特質、異文化交流・越境異文化の特質、自己についての特質、学習内容についての特質、そして省察の特質の 5 つの要素が考えられる。

今後の発展と展望については、①外国語教育・学習におけるデジタルシチズンシップの重要性についての考察、②教師と生徒のマルチ・デジタル・リテラシーとデジタル・コンピテンシーの開発、③教師および教師トレーナーに、外国語教室でのデジタルシチズンシップ教育の実践を促進するためのツールやリソースの提供、の3つを目的として研究を続けている。本プロジェクトのホームページは以下である。  
<https://www.dicelang.anglistik.uni-muenchen.de/index.html>



<感想>

今回、リュトゲ氏のご講演で、ヨーロッパ全域の教育現場における DiCE in FLE の導入の指針となる新しい政策的枠組みを学ぶことができた。日本でもコロナ禍以降、急速に教育現場におけるデジタル化が進むが、どのようにデジタルを教育に取り入れるのか、教員は考える必要があると改めて考えた。もちろん、学習者が好みそうな学習アプリやホワイトリスト形式の情報提供など、児童生徒に対し情報の関わり方に配慮する(たまに気をつけすぎ?) ことには、すでに多くの学校が取り組むが、cyberbullying を始め、ICT を使用する

ことは便利な反面、多様な危険も伴う。

児童生徒が、自分のこともだが、他者にも同様に尊重意識をもって、デジタルツールを使用することも一層求められるようになるだろう。そのためには、氏が述べたように、外国語学習との関連性を考える必要があると考える。なぜなら、ICT ツールによって、より国境の枠組みを超え、多様な人々と交流できる時代だからこそ、まず文化の異なる他者に対する見方や視野を広める必要があるからだ。また、異文化の人々とのコミュニケーションでは、Council of Europe(2020: <https://www.coe.int/en/web/reference-framework-of-competences-for-democratic-culture/>) による、民主的異文化能力の参照枠 (RFCDC) 同様、民主的意識を高めることも重要となる。他者を尊重する前提として、自己の民主的な市民意識を高めることは必然だからである。また、異文化理解力を高め、異文化間コミュニケーション能力 (Byram, 1997) を育て、さらには「教員のブラック化」や「インクルーシブ教育」、「外国人生徒のための教育支援」など、教育システムにおいて、公正 equity そして正義 justice をさらに推進する改革も必要になろう。

日本でも現在、文部科学省は、3つの資質・能力、「知識・技能」だけでなく、「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」を提唱している。外国語教育の目的は、単なる英語の知識・技能を提供し、暗記させることではもはやなくなりつつある。さらに「主体的・対話的で深い学び」では、自律した学習

 <b>成美堂 2023 年度 新刊のご案内</b>		〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-22 TEL 03-3291-2261 / FAX 03-3293-5490
<b>Global Perspectives Listening &amp; Speaking Book 1</b> ..... 2,750 円(税込)	<b>CLIL: Discuss the Changing World 2</b> ..... 2,640 円(税込)	
<b>Global Perspectives Listening &amp; Speaking Book 2</b> ..... 2,750 円(税込)	<b>A COMMUNICATIVE APPROACH TO THE TOEIC® L&amp;R TEST</b> <b>Book 2: Intermediate</b> ..... 2,530 円(税込)	
<b>Let's Read Aloud &amp; Learn English for Science</b> ..... 2,750 円(税込)	<b>BEST PRACTICE FOR THE TOEIC® L&amp;R TEST</b> <b>-Advanced-</b> ..... 2,750 円(税込)	
<b>Our Science</b> ..... 2,530 円(税込)	<b>Meet the World 2023 -English through Newspapers-</b> 2,310 円(税込)	
<b>Trend Scope</b> ..... 2,640 円(税込)	<b>Rethinking the World -Dare to Know-</b> ..... 2,200 円(税込)	
<b>Global Business Case Studies</b> ..... 2,640 円(税込)	<b>Flow: Reading Without Borders</b> ..... 2,640 円(税込)	
<b>CBS NewsBreak 6</b> ..... 2,860 円(税込)	 URL: <a href="https://www.seibido.co.jp">https://www.seibido.co.jp</a> e-mail: <a href="mailto:seibido@seibido.co.jp">seibido@seibido.co.jp</a>	

者を育成することが求められている。学習者が、なぜ外国語を学ぶ必要があるのか自己の目的を見出し、社会を構成する多様な市民と公正な立場で交流し、ともに社会のさまざまな課題に対して言葉や文化の壁を越えてコミュニケーションをしながら、同じ社会を構成する市民としてお互いの well-being を目指すことに、外国語学習の意義があるのだろう。これからは外国語学習とデジタルシチズンシップ教育の両者は相互補完的に学習者の意識を高めることとなるだろう、と理解できた。

安達理恵(梶山女学園大学)

## シンポジウム報告

### **2022 年度中部支部大会 シンポジウム**

#### **「プロジェクトベースの**

#### **国際交流を通した外国語教育」**

**若林 茂則氏(中央大学)**

**中川 右也氏(三重大学)**

**米澤 由香子氏(東北大学)**

**藤掛 千絵氏(南山大学)**

**2022 年 6 月 4 日 [Zoom 開催]**

安達理恵氏(梶山女学園大学)によるコーディネートのもと、4 名の講師が、ICT を利用した国際交流活動の事例を紹介し、現在の課題と今後の国際交流のあり方について考えるシンポジウムが行われた。「ワクワクする学習」「本物の学習」「意味のある交流」「お互い様」など、講師によって、使用された表現は異なるものの、いずれの活動事例においても、1) 必然性のある学習課題の設定、2) 学習者中心の活動、3) 対等な関係での学び合い、に焦点が当てられていた。

若林茂則氏(中央大学)からは、高校生・大学生を対象とした英語授業で行った、台湾やタイなどアジアの学習者との活動事例の紹介があった。国際交流活動を行うと、多くの学習者が楽しんで授業に参加し、活発に活動を行うが、交流活動は記録にも記憶にも残りにくいという。こうした課題に対処するため、氏の研

究グループは、Dialogbook というアプリを開発し、高校生・大学生が簡単に学習活動を記録できるようにしている。高校生の初回と最終回の交流記録を比較すると、活動が深まっている様子が視覚的にも確認できた。氏によれば、交流活動を行うための準備段階こそが、最も価値のある作業であるとされる。準備段階における膨大な量の交流記録からは、学習者にとっても教員にとっても、まさに、記録にも記憶にも残る授業であっただろうことが窺われる。

中川右也氏(三重大学)は、高校・大学に加え、小学生を対象とする国際交流プロジェクトの紹介を行った。氏の研究グループでは、ビデオ通話を利用することで、香港やマレーシアなど様々な国の児童との交流活動を行っている。小学生へのアンケート調査やスピーキング力調査からは、活動の前後で、英語授業に対する好意度や、発話語数の伸びが確認できたとされる。また、1 回限りの活動ではなく複数回の活動によって、効果が見られることが紹介された。将来、メタバースを利用した交流が行われる場合には、「別の自分」を投影したコミュニケーションも可能となることも指摘された。

米澤由香子氏(東北大学)からは、国内 6 大学が参加する「グローバル人材育成推進事業」の共同プロジェクトの紹介があった。このプロジェクトでは、留学生と日本人大学生の共修を行ってきたが、コロナ禍で留学生が入国できない状況が生じたため、オンライン活動を取り入れたという。オンラインでの活動については、参加者から、対面と同様の肯定的評価が得られたとされる。残された課題としては、各大学の日程調整に加え、海外パートナー大学との共修では、時差への対応があることが報告された。

藤掛千絵氏(南山大学)からは、「大学の世界展開力強化事業」として実施した、オンライン短期留学プログラムの活動紹介があった。プロジェクトに参加している米国の大学生は、日本語学習者であり、日本人大学生の日常

生活や日本の文化に興味を持っていることから、英語と日本語を交互に使用したプロジェクトへの参加も積極的に行われたと言う。日本人学生に肯定的評価の高かった活動としては、米国の大学の日本語授業への参加が挙げられた。互いに「学習者」であることが、活動参加後にも学習へ良い影響を与えていたとされる。

事例紹介後には、フロアを交えて、語学教育、また、人間教育としてのプロジェクト活動の教育効果や評価等について、活発な議論が交わされた。これからの時代の外国語教育における ICT 活用方法を考える上で、大変有意義なシンポジウムであった。なお、『JACET 中部支部紀要』第 20 号には、各シンポジウム講師による講演論文が掲載されている。

石川有香(名古屋工業大学)

## 研究会報告

### 日英インタラクション研究会

#### English and Japanese Interaction

本研究会は、1990 年代より中部支部で長年にわたって活動してきた待遇表現研究会を基盤とし、2019 年に新たに立ち上げた研究会です。待遇表現の研究は言葉に現れる対人関係のとらえ方を研究するものでした。しかし、研究を深めるに従い、人と人との関係の築き方は、単に待遇的な表現だけではなく、私たちの話し方全体にも大きく影響していること、そして日本語と英語にはその話し方にかなり根

本的なところで違いがあることに思い至るようになりました。この気づきが本研究会の立ち上げのきっかけとなりました。従いまして、我々の研究の目的は、単に日本語と英語のインタラクションの方法の違いを明らかにするだけではなく、インタラクションの背後にあるそれぞれの文化の価値観や対人関係のあり方を明らかにしようとするものです。談話分析、社会言語学、エスノメソドロジーなどと深く関わっています。そして、このようなインタラクションの違いを英語教育の中でどのように扱い、指導するべきなのかも考察しています。

しかし研究会を立ち上げ、さあこれからという矢先にコロナ禍に見舞われ、残念ながら対面での研究会はほとんどできていません。それでもオンラインを用いながら、なんとか年 4-5 回の研究会を実施しています。幸い、オンラインを用いたおかげで、参加者は中部だけにとどまらず、関東から中国地方まで広くにわたり、普段なかなかお目にかかれない方々とも活発な議論ができています。22 年度は、これまでのところ以下の 3 回の研究会を行いました。いずれの会も、研究会会員とそれ以外の JACET メンバーで 10 数名が集まりました。5 月の研究会では、広島大学の柴田美紀氏に「グローバル時代の高等教育国際化と EMI:教育で何が起きているのか」というタイトルで、日本人学生と留学生がともに英語で学ぶ EMI の現場での実態をお話いただきました。また、8 月には、東京都市大学の稲垣亜希子氏に「留学環境下における語用論的



**Activator Next**  
大学生の自信を促す英語コミュニケーション  
塩澤 正 / Adam Martinelli 著

大人気の Activator シリーズ最新刊！  
多彩なアクティビティ（ロールプレイや対話活動、ディスカッション）  
を通して、大学生必須の会話をグレードアップ

¥1,900 (税込 ¥2,090) B5判 120 pp. 全 15 章 ISBN978-4-7647-4178-2

**K 金星堂** 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-21  
電話 03-3263-3828 FAX 03-3263-0716  
text@kinsei-do.co.jp <http://www.kinsei-do.co.jp>

能力の発達と語用論的動機づけとの相関について」というタイトルで、留学前後での語用論的能力の比較についてご発表をいただきました。10 月には、京都女子大学の大谷麻美が中心となって読書会を行い Troy McConachy の Developing Intercultural Perspectives on Language Use (2018) を読み、議論を行いました。また、11 月の中部支部 2022 年度第 1 回定例研究会では、会を代表し大塚容子と大谷麻美が「NS-NNS 間の英語会話で何が起きているのか：インタラクションの観点からの分析」を発表しました。さらに年明けには、4 回目の集まりを予定しています。

今後も読書会、データセッション、研究発表などを行いながら、JACET の本大会での発表も行えるように励んでゆきたいと考えています。また、研究成果を教育に還元できるよう、インタラクションの実践的指導のあり方についての研究には、とりわけ重点を置いていく予定です。

大谷麻美(京都女子大学)

#### 掲示板

『JACET 中部支部紀要』第 21 号への掲載論文の投稿(学術論文、研究ノート、実践報告、書評)を募集します。奮ってご応募ください。

締切: 2023 年 9 月 20 日  
刊行予定: 2023 年 12 月  
掲載料: 刷り上がり 1 ページにつき、1,000 円  
問合せ: JACET 中部支部事務局  
(紀要担当: 柴田直哉)

投稿方法等の詳細については中部支部ホームページでご確認ください。

中部支部紀要編集委員会

## 事務局より

### ◆ 新入会員のご紹介

2022 年 5 月から 2022 年 12 月までの中部支部所属新入会員は以下の方々です。(敬称略、入会順)

児玉 靖明(朝日大学)  
勝田 玲子(名古屋造形大学(非常勤))  
クロスビー ロナルド(岐阜聖徳学園大学)  
岡村 明夢(静岡大学(大学院生))  
ブルノティ ジョシュ(愛知県立大学)  
マギー グレン(愛知県立大学)  
Rebecca Jackson(桜花学園大学)  
高野 美帆(富山大学)  
尾関 智恵(愛知工科大学)  
新美 徳康(広島大学(大学院生))  
日比野 彰朗(岐阜北高等学校)  
広瀬 八重子(名古屋大学(大学院生))

### ◆ 2022 年度第 2 回支部総会報告

11 月 27 日に開催された第 2 回 JACET 中部支部総会で 2023 年度事業計画及び予算案・人事案が了承されました。

### ◆ 2023 年度中部支部役員(敬称略)

顧問: 倉橋洋子(東海学園大学名誉教授)  
吉川寛(中京大学)  
理事・支部長: 鎌倉義士(愛知大学)  
副支部長: 今井隆夫(南山大学)  
事務局幹事: 大瀧綾乃(静岡大学)  
事務局幹事補佐: 内田政一(桜花学園大学)  
事務局幹事補佐(紀要担当): 柴田直哉(名古屋外国語大学)  
幹事支部会計担当: 梶浦真由美(名古屋市立大学)

支部研究企画委員(50 音順)

石川有香(名古屋工業大学)、今井隆夫(南山大学)、内田政一(桜花学園大学)、江口朗子(名古屋女子大学)、大石晴美(岐阜聖徳学園大学)、大瀧綾乃(静岡大学)、大森裕實(愛知県立大学)、岡戸浩子



(名城大学)、梶浦真由美(名古屋市立大学)、鎌倉義士(愛知大学)、木村友保(名古屋外国語大名誉教授)、倉橋洋子(東海学園大名誉教授)、小宮富子(岡崎女子短期大学)、佐藤雄大(名古屋外国語大学)、塩澤 正(中部大学)、柴田直哉(名古屋外国語大学)、下内 充(中部学院大学)、白畑知彦(静岡大学)、杉浦正利(名古屋大学)、鈴木達也(南山大学)、藤田 賢(愛知学院大学)、藤原康弘(名城大学)、藤村敬次(愛知工業大学)、三上仁志(中部大学)、吉川 寛(中京大学)

支部紀要編集委員会

委員長: 石川有香

委員: 大石晴美、岡戸浩子、下内 充、白畑知彦、杉浦正利、藤原康弘、三上仁志

#### ◆ 2023 年度支部大会のお知らせ

第 38 回中部支部大会を 2023 年 6 月 10 日に開催いたします。研究発表の他、基調講演等を予定しております。

なお、第 1 回支部総会も同日開催いたします。総会資料は当日配布いたします。本資料の内容は理事会にて審議・承認を得ており、報告事項となります。

支部大会に関する情報は、JACET 中部支部 HP をご覧ください。

#### ◆ 2023 年度講演会・定例研究会のお知らせ

2023 年第 1 回定例研究会・中部支部講演会は 2023 年 11 月 26 日(日)に、第 2 回定例研究会を 2024 年 3 月 2 日(土)に開催を予定しております。詳細は JACET 中部支部ホームページに掲載予定です。

#### ◆ 2023 年度 JACET 国際大会のご案内

第 62 回国際大会は 2023 年 8 月 29 日(火)~31 日(木)に明治大学で開催されます。大会テーマ

「言語教育における連携の再構築と発展」

“Reframing Collaboration in Language Education and Beyond”

詳細は JACET 大会ホームページをご覧ください

さい。

#### ◆ 住所変更届提出のお願い

支部会員みなさまに、紀要や Newsletter などの郵便物をお届けできない事例が増えていきます。お手数ですが、転居の際には、JACET 本部事務局と中部支部事務局の両方に、住所変更届をご提出ください。詳細は、以下のサイトをご覧ください。

・JACET 中部支部ホームページ

<http://www.jacet-chubu.org/>

◆ ニュースレターは会員の皆様のフォーラムです。ご意見、ご要望等は事務局までメールでお送りください。投稿も歓迎いたします。なお、メール件名は【JACET 中部】とお書き添えください。

#### JACET 中部支部事務局

〒466-8555 愛知県名古屋市昭和区  
御器所町

名古屋工業大学 吉川りさ研究室内

E-mail: [yoshikawa.lisa@nitech.ac.jp](mailto:yoshikawa.lisa@nitech.ac.jp)

JACET 中部支部ホームページ

<http://www.jacet-chubu.org/>

#### JACET-Chubu Newsletter No. 49

2022年12月25日発行

発行者: 一般社団法人 大学英語教育学会

中部支部 (代表) 今井隆夫

編集者: 内田政一、大瀧綾乃、吉川りさ